
スウィートネス・オブ・ストロベリー

あざ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スウィートネス・オブ・ストロベリー

【Nコード】

N0113Y

【作者名】

あざ

【あらすじ】

三月の冷え込む早朝、五色凛々子は人を待っていた。それは十年程焦がれた相手。だが、凛々子の心には別の気持ちがあった。出会ってたった半年足らず。それだけの期間しかいなかったのに心には残っていた。白井いちご。凛々子がスマ以外で最初で最後心を乱したのは、同性だった。※過激な表現は在りませんが同性愛描写が在ります。お気を付けください。

改札前 にて

この街からは出られない、と思ったのはもう十年近くも前のことだった。私は当時十五歳。あのときも、こうしてこの駅の改札を見ていた。

「寒い」

一言、洩らして笑った。もう三月も半ばだと言うのに山に沿ったこの辺りは冷える。マフラーだって在るのに。首が冷えた。息が固形になる妄想だってする。不可思議な話だ。

あのときも、こんな風に冷えただろうか。覚えていない。あのときはただただ。

「……」

ただただ、スマに焦がれていた。

『スマ』とは、本名を端山純真はたやますみまさと言う少年のことだった。本人は皮肉しか感じられないと本名で、勿論下の名前だが、呼ばれるのが嫌だそうで、誰が付けたか知らないあだ名を私と出会ったころにはすでに率先して名乗っていた。自己紹介のときも「端山。でなきゃ、……“スマ”って呼んで」とぶっきらぼうに言った。今でも鮮明に浮かぶ。声変わりの前だった。

それからどれくらい経って、あのとき、ここに立ったのだろうか。私はスマを見送ったのだ。スマのお父さんが急性心不全で亡くなって、いろいろ在って、スマが、この街を去った、あのとき。

私はスマを見送ったのだ。スマの背を見詰めて、スマに焦がれた。

私は、今も変わっていない。今もスマに焦がれている……けれど。あのときと、違った。私は、あのときと違った。年を取ったこと

ではない。そのことではない。

私の、感情だった。

正直、二十五になる今まで、付き合った男は数人いた。でもそのことでも無いのだ。誰と付き合っても、結局スマを求めることをやめられなかった。だから、スマから連絡を受けて、ほぼ迷わずここに来た。来たのに。

私は今スマに焦がれながら、別の人を想っている。

体の芯まで浸すような寒さにマフラーを手繰る。だが、これは本当に寒くてだろうか。寂しくて、ではないだろうか。

私が彼女を思い出すと、一番に脳裏に映るのはいつも決まって、初めて会ったときの夏の日だった。

私が今もスマに焦がれながら想う人。

白井いちご。

私がスマ以外で気持ちを注いだ初めての、そして最後の相手は紛れも無く同性だった。

新しい事務員／1

彼女が私の前に現れたのは去年の夏だった。その年は最高気温を日々更新するような暑い夏で、彼女と初めて見えた日も例に洩れず、陽射しはすべてを灼き尽くして漂白するかの如くで、うんざりしていたのを記憶している。日が傾いて、だいたい熱量が緩和されたのに息を付いたことも。塾で生徒にあまり遅くならないように帰宅すること、暑いからと言って寄り道をしないことを言い含めて送り出したことも。夏期講習の、いつもの一齣だった。

私は英語の教員免許を持っていた。だけど教師には向かない性格だった。自己評価だけど。だから、塾の講師になった。この、小さな村がやっと町になったような場所では地元で就職出来るところは少ない。私は運の良いことに選り好みして置きながら就職難にも悩まず済んだごく一部の人間だった。

「りっこー。お前、聞いた？ 新しい事務員来るんだって」

子供たちを送り出して、職員室兼事務室に戻ろうとした私を呼び止めたのは、同僚で元同級生の篠原だ。しのばら“りっこ”は私のこと。

五色凛々子。ごしきりりこゆえに、『りっこ』。

新しい事務員、とは初耳だったが私は特に興味もそそられず、素直にそれを形にした。「へえ」私のこの反応が気に入らなかったらしい。篠原の片眉が撥ねる。だけど古い付き合いの私はちっとも頓着しなかった。一応フォローは入れてみるけども。

「だって、どうせ、また知り合いなんじゃない？ でなくたって顔見知りでしょう？」

私は肩を竦めた。前述通り、この町は村が頑張って町になったよ

うなところで辺鄙な場所に在った。山と海に囲まれ、町の中には商店街も在るし時代の流れか大型ショッピングモールも出来たけれど、山を越えるせいか隣町まで電車で未だ三十分以上掛かる。また、空港や交通のハブ的な主要都市に出るとなると二時間以上掛かった。車が無ければ暮らすのも不便な場所だ。だいたいの若者は町を出てしまう。進学で出た者も、そのまま都会で就職なんてざらだった。

土地だけは広大なこの町の中で雇用枠はそう無い訳で、必然と職場環境は知れて来る。どうせ、また、の言葉が指すように、新しい人が入ろうとご近所だった、元学校の同窓生だった先輩後輩だった、なんて当たり前。

篠原と私が良い例だし。たとえば国語を担当している同僚は私と篠原の部活の後輩だ。女子バスケの私は多少違うのかもしれないが男子バスケの篠原と後輩、蔓屋つるやと言うが、コイツらは完全に先輩後輩なのだ。他にも、私たちは中学の二年生かたまに一年生を教えているけれど三年生を受け持っている講師は何とみんな同級生だったと聞いた。

まあ、元より塾の経営者が私たち講師陣の恩師なのだから、当然の結果と言うか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113y/>

スウィートネス・オブ・ストロベリー

2011年11月8日16時20分発行